「減氣・験氣・元氣」小考

栾　竹民

（一）はじめに

氣なるものはまことに摩訶不思議な存在である。古代中国に現われて以来、数千年の時空をずっと貫通して滅びず、現代に於いても尚翼鑅たる現役である。さて、斯様な「氣」は如何なる意味や性格をもって日本に入ってきたのか、亦、日本に渡来した「氣」の概念が何時、如何にして形づくられ、時代の推移と共に、どのように変化し、展開されてきたか、といった点を明らかにすることを研究の目的とする。目的を達成するために、各時代の両国文献に於ける「氣」または「氣」によって構成された語を詳細に調査し、その意味用法を考究、比較するというような方法が有効である。本稿は「元氣」を中心に考え、研究の一階梯としたい。

「元氣になった」とか「お元氣ですか」という表現は、日本語ではよく用いられ、耳にするものである。いわば、「元氣」は日常用語として使用されていると言えよう。では、かかる「元氣」は、奈良、平安、鎌倉時代に遡っては果たして現代語の如く使われるか、さもなければ、如何なる語によって代替されるのか。この点については、従来の研究の有り方を、今、私に整理してみると、概ね、次の三説に分けられようかと思う。それを要約して言えば、一、「元氣」→「元氣」[1]二、「減氣」→「元氣」[2]三、「験氣」→「元氣」[3]といった三種の変わり方が見られる。以下、斯様な変化が何時、如何なる文献で、何故起こったのかという点について検討を加えよう。それに先立ってまず、「元氣・減氣・験氣」のよみを確認する必要がある。三者のよみについては次のように古辞書と訓点資料から判明する。

減氣（ケンキ）違例ー　（塵芥下13オ①）
減少（ゲンセウ）ー損（ソン）ー氣（キ）　（文明本節用集602⑤）
減氣（ゲンキ）（ゲンキ）（ゲンキ）　（弘治二年本節用集177⑤）
験氣（ゲンキ）　疾ー病所レ言　（書言字考節用集言辞11冊14⑥）

元氣（ゲンキ）　血氣（ケッキ）　（同右、肢體氣形五冊22④）

元（平聲）　氣（去聲）　倏（シク）—動（トウシテ）（平聲）　（六地蔵寺蔵本性霊集159）

吐（ハク）元—氣之精（平聲）—液（エキ）　（久遠寺蔵本朝文粋巻十二180⑬）

（二）中国文献に於ける「元氣」

中国文献を、その表現形式、内容によって韻文、散文、佛書という文章ジャンルに分かって、調査したところ、「元氣」は各文章ジャンルからその用例を検出することが出来たが、「減氣」「験氣」という語は確認できなかった。故に「減氣」と「験氣」とは「元氣」と異なり、中国語出自の漢語ではなく、日本で作られた所謂和製漢語である可能性が十分考えられる。[4] これは「氣」が日本に伝来して形態上の変化が生じたものと言えよう。

以下、今回調べて得た「元氣」の用例を挙げてその意味を考えよう。

(1) 元氣轉三統五行於上　（漢書・律暦志）

(2) 俱稟元氣、或獨為人、或為禽獸　（論衡・幸偶）

(3) 上古之世太素之時元氣窈冥未有形　（潛夫論巻六本訓第32）

(4) 元氣者、天地之始、万物之祖、　（唐・陳子昂・諫政理書）

右の「元氣」は天地未分の前の渾然一体たる氣である。いわば、天地自然を成す根本のエネルギーとして用いられる。これは正に中国の戦国時代に出現した氣一元論のことを言う。つまり、天地宇宙の一切を氣に還元して把捉する思想である。ここでいう「氣」はほかでもなく「元氣」、「精氣」で、亦、『管子』内業篇に述べている「精」と同質のものである。「凡物之精、此（比）則爲レ生。下生二五穀一、上爲二列星一、流二於天地之間一、謂二之鬼神一。藏二於胷中一、謂二之聖人一」とある。「元氣」は人と宇宙を貫いて流動無形の根源的存在である。

(5) 夫亡者、元氣去體、貞魂、　（後漢書・趙咨傳）

(6) 守神保元氣、動息随天罡　（張籍歌詩、学仙巻七446）

(7) （柳）公度善攝生（略）曰吾初無術、但未嘗以元氣佐喜怒　（舊唐書一六五柳公綽傳）

(8) 穀氣勝元氣、其人肥而不壽（太平御覧八三七晉楊泉物理論）

(9) 凡人元氣重十六兩、漸老而耗　（蘇軾・龍川別志）

(10) 譬諸疾病者、元氣已虛、邪氣已甚、姑以平和湯劑扶持之可也、　（宋・錄鼎臣、東原録）

右に引いた「元氣」は人体生命活動のあらゆる現象の本、機能として用いる。即ち、人間の生命力の源となる。これは『荘子』外篇に次のように表明されている。「變而有レ氣。氣變而有レ形、形變而有レ生。今又變而之レ死」。

以上の考察で中国文献に於ける「元氣」の意義は次のように帰納できる。

△人間をも含めての萬物を構成する源泉

となる。[3] つまり『荘子』外篇に説いている「天下を通じて一氣のみ」という「氣一元論」の「一氣」と解される。日本では江戸時代になって朱子学の「理氣二元論」を批判し、「天地の間一元氣のみ」を主張した。それは「氣一元論」のことであり、その「元氣」はほかでもなく中国の「元氣」を指すのである。だから、当時（江戸時代）の「氣一元論」とそれに関わる思想論争とが、荘子の時代の中国の思想の「復古」と言われたのである。

中国の「元氣」と現代日本語の「元氣」とを比較すれば、両者の意味上の逕庭が大きく存在する。そこで、現代日本語に常用される「元氣」は果たしてそのまま中国語の「元氣」を継受したのかという疑問を持たざるをえない。

（三）日本文献に於ける「元（減・験）氣」

二項の考察で明らかになるが如く、「元氣」は中国語に見られて、それの出自となると考えてよい。以下、考察を加える和製漢語の「減氣」「験氣」とは位相上の差異が存在する。

日本文献を、その表現形式、内容に基づいて和文、漢文、和漢混淆文と分かって、「元氣」を調べたところ、奈良時代文献からはその用例を確認できず、平安鎌倉時代文献には四例現われるが主として漢文に集中している。これは今回調査不足によるかも知れないが、「元氣」はその使用量と使用の文章ジャンルから考えると、非日常の書記用語に過ぎないと言ってもよかろう。現代語のように日常用語として用いられる「元氣」と性格がはっきり異なっている。その四例の「元氣」を挙げて意味を考えよう。

(1) 元（平声） 氣（去声） 倏（シク）—動（トウジテ）（平声） 莖（フン）—（平声）牙乍（ケタチナカヒ）—驚（ロク）

（六地蔵寺蔵本性霊集159）

cf 元氣否塞、玄黄噴簿、辰星亂逆 （曹植文集巻160⑬魏徳論）

(2) 體（テイス）三陰陽之氣—候二（略） 吐（ハク）三元—氣之精（エキ）（平声）—液二

（久遠寺蔵本朝文粋巻十二180⑬）

(3) 一天之下、均含元氣

（鎌倉遺文二巻326⑧）

cf 昇靈臺望元氣

（後漢書、明帝紀）

(4) 孔老教ニ元氣道ヨリ生ジ、万物天地ヨリナル、混沌ノ一氣、五運ニ轉反ジテ、

（高山寺明恵上人行状上59オ）

右に引いた、鎌倉時代までの日本文献に見えた「元氣」は四例とも天地自然に広がり、萬物を創出する精氣という意味として用いられる。これは参考例の示すように本来の中国語の「元氣」と同じ意味で、それを継承したと言えよう、意味といい、使用量といい、現代日本語の「元氣」は平安鎌倉時代の「元氣」との間には大きく隔りが存在して、それを直接に継受したと到底考えられ難い。

次に中国語には見られなかった「減氣」と「験氣」について検討を加える。先ず、「験氣」を見よう。今回調査した限りの鎌倉時代までの日本文献では、「験氣」は右記の「元氣」より使用量が尚更

少なく、僅か一例しか検出できなかった。使用度から見れば、「験氣」は「元氣」と同じく非日常用語と言ってよいであろう。この点では現代日本語の「元氣」と明白に相違する。その一例の「験氣」を挙げて意味を考えよう。

(1) 熊野御山下向人其験氣之利生奪取者三所在

（諸山縁起347上⑱）

例中の「験氣」は祈禱、加持などの效き目という意味で用いて、次の「效験氣」と殆ど同じ意味であると考えられる。

△雖有二祈療治一無二效験氣一　（百錬抄176①嘉禎元年）

右の考察で、意味からも使用量からも現代語の「元氣」は「験氣」との格差が余りにも大きいため、それから派生したものであると言い難かろう。意味変化の条件とも言えるが、多用されなければ、意味が変化しかねることからも考えると、「元氣」と「験氣」の間には意味変化が起こり難いのではないかと推察される。次に「減氣」について検討を加えよう。

今回調べた日本文献では、「減氣」は和文からは確認されず、漢文と和漢混淆文とのみにその用例を検出できた。が、その使用範囲から見れば、右に考察した「元氣」「験氣」より拡大したと言えよう。尚、使用状況は左記の表の通りとなる。

表に依れば、次の諸点が言えよう。「減氣」は、その使用量が「元氣」「験氣」を遙かに上回っている。亦、「減氣」は奈良時代文献にはまだ登場しておらず、平安時代になって始めてその漢文に現われるようになった。但し、平安時代漢文のすべてではなく、公家日記に偏用される傾向性を見せる。それは鎌倉時代になっても依然として持続する。従って、平安鎌倉時代に於ける「減氣」は先ず書記の常用語として認められようが、和漢混淆文にも見えたことによって、書記用語から離脱して一般の日常用語に変身したのではないかと言えよう。だから、使用量にせよ、使用範囲にせよ「減氣」は「元氣」「験氣」と違って、現代語の「元氣」と類似する。次に先ず平安時代文献の「減氣」の意味について、『小右記』に見えた十三例を中心に検討を施す。

(1) 冷泉院如霍乱御悩御坐、（略）冷泉院従去夕頗減氣御坐者、

（小右記二189⑨）

「減氣」の「減」字はその意味が次に挙げる古辞書から分かる。

減、損也又姓漢有減宣。　（校正宋本廣韻336⑨）

減、［説文］損也。［玉篇］少也輕也、又水名也、又姓也、俗作減非。　（康熙字典633⑧）

のように物事の状態、量がかるく、すくなくなったり、おとろえたりするという意味として用いられる。それに対して、日本の和化漢文を今回調べてみたところでは「減」字は主として病状のおとろえるのに偏用するといった独特な用字法を見せている。「減」は「氣」とのみならず、「平、損、少（小）」なども結合して「平減、減平、

減氣			
用例数	文献	時代	文章ジャンル
13	小右記	平安	漢文
1	御堂関白記		
6	春記		
14	水左記		
5	中右記		
3	長秋記		
8	殿暦		
1	兵範記		
2	台記		
4	吉記		
1	三長記		
1	後拾遺往生伝		
59	計		
4	平戸記	鎌倉	
22	玉葉		
6	明月記		
1	花園・伏見天皇宸記		
12	吾妻鏡		
7	猪隈関白記		
4	鎌倉遺文（1-10.16）		
1	南都往来		
57	計		
3	今昔物語集	院政	和漢混淆文
1	正法眼蔵随聞記	鎌倉	
1	栂尾明恵上人傳		
5	計		
121	合計		

減損、少減、小減」が出来、病態がよくなることを表す。

減、任斬反、省、輕、損、倦

（高山寺本篆隷萬象名義五帖100オ⑥）

衰オトロフ耗減損芫萎　（黒川本色葉字類抄中人體65ウ④）

(2) 御目更不御減氣云々　（小右記四17⑧）

(3) 主上御目未御減氣　（同右79⑭）

(4) 大納言所惱（略）晩頭大納言更無減氣　（同右203⑬）

(5) 座主所被勞無減氣　（巻五138⑤）

(6) 座主所惱事早旦取案内、々供報云、未有減氣者（同右189⑨）

(7) 和尚所惱從昨弥重、（略）報云、更無減氣　（同右79⑭）

(8) 去夕重煩、修諷誦所□（ヤカ）其後頗宜、然而熱氣未散者、未有減氣者　（巻六181⑬）

(9) 資房熱氣少許（略）資房已有減氣　（同右185⑭）

(10) 療治如昨、聊有減氣（略）余所勞面疵似愈合　（同右207④）

(11) 相成云、春宮大夫所勞從昨日有減氣　（巻七207⑨）

(12) 從昨痢病發、（略）無敢減氣者、　（同246③）

(13) 從去夕亞將夕惱氣、似風病、但頭打頗熱、時疫歟（略）從晩有減氣　（巻九2③）

右に列挙した「減氣」の用例から次のことが明らかになる。「減氣」はいずれも人間の体の非健康な状態或いは病氣と共起して用いられるという共通点を持つ。残りの平安時代文献の「減氣」もいずれも『小右記』のと同じく「勞、御邪氣、病、温氣、御違例、御不例、瘡、御心地、病惱、腫物」などのような体の非健康な状態と共に用いられる。但し、一例のみが病気ではなく、「奇星」の状態と一緒に使われる。

△今夕奇星頗有減氣　（中右記三93上⑫）

「減氣」は奇異な星の勢いが衰え、弱くなることを示す。「減氣」の対象は違うものの、述語「有」と「オトロフ」という意味は右記の十三例と共通している。

以上の考察を通して「減氣」の意義は次のように帰納できよう。

（一）病勢が衰えて、快方に向かう

（二）物事の状態が弱くなる

と二つに大別できる。残りの平安時代文献の「減氣」を検討した結果、いずれも右記に分類した二つの意義と一致すると判断されるが、使用頻度から見れば、平安時代文献では、（二）の意義を示す「減氣」は一例のみで、それ以外は全部（一）の意義となるという顕著な格差が見られる。従って、（一）の意義は中心義となるが、（二）の意義は周辺的な働きを成す。

尚、公家日記に於いては、「減氣」に対して病状或いは事態が重く、わるくなることを表す「増氣」という表現も存する。両者が対義的関係で一進一退の病状、事態を表すのに用いられる。更に、「増氣」も「減氣」と同様に日本で作られた和製漢語であると思わ

れる。

△三位病無増氣云々　（小右記二132⑤）

△所勞有増氣、未能起居者、　（同右六185⑦）

△去夜奇星又出、但隨日數頗長増氣　（中右記三88上①）

亦、病気というものは「減氣」と「増氣」の示すが如く、軽くよくまたは重くわるくなるのみならず、時にはよくもわるくもなく、そのままの状態となることもある。斯様な時は次のように表される。

△中將來云禪室無増減由、（略）依禪室病惱至急、　（小右記八42⑤）

△御心地無増減之氣　（水左記56上⑬）

とある。

更に和化漢文では、「減氣」と類義的な表現も多く用いられている。それらを列挙すると、次の通りとなる。

△参中宮今日頗有平損之氣義海律師云、（略）有御病減損氣云々、　（貞信公記209④）

△自舊年所勞本病未平損　（九暦36⑤）

△日來所惱不減　（小右記一281⑫）

△近江守朝臣日者病惱、自昨夕似減平者　（同右二94⑭）

△唯瘡氣頗伏者、（略）式光今日夕平減氣、　（同右六226⑮）

△後心地宜禰（弥）有減氣色、　（殿暦三147⑬）

△御心地頗有宜氣、　（水左記53上①）

「減氣」より更に病状がよくなり、全快に達する、即ち、病氣が治り、平常の健康状態にもどることを表す表現としては次のようなものが見られる。

△朕見二疲勞一惻二隱於心一思二其平復一計無レ所出　（続日本紀養老元年十一月）

△所惱平復但食頗減、　（小右記二39⑤）

△依有所勞假文、猶不平愈、　（同右一124⑪）

△昨日以後有平愈氣者、　（同右三43⑤）

△日來煩胸病、昨日頗有平氣　（同右四154⑦）

△此間御藥少有二平痊之氣一、　（扶桑略紀305⑩）

とある[6]が、現代語の「全快、全治、全愈」というような表現は現われていないように見える。

さて、「減氣」の見えなかった和文では「減氣」の表す意味合いが如何なる表現によって担われているだろうか。

△病にいといたうわづらひて、すこしをこたりて内にまいたりみり。　（大和物語百一段279）

△かの山てらの人はよろしくなりて　いて給ひにけり　（源氏物語、若紫176⑫）

△病ひありて、東山なる所に侍りけるを、よろしく成て後、いかがと人のとひ侍りける　（千載和歌集、1141詞書）

△御ものゝけともいとこゝろあはたゝしけなれは御いのりのかた

はさりともとおほさるゝにうちつけにやすこしかるませたまふやうなれは　（栄花物語巻十三、二⑲）

のような表現は「減氣」不在によって生じた空白を補完するように思われる。

以上、平安時代文献に於ける「減氣」について検討してきた。次に鎌倉時代文献の「減氣」を見よう。先ず、漢文に於ける「減氣」について『吾妻鏡』に見えた十二例を中心に考究を加える。

(1) 御不例減氣之間、　（吾妻鏡前篇511⑫）

(2) 前奥州義時病悩。日者御心神雖レ令二違亂一。又無二殊事一。而今度已及二危急一。（略）可下令属二減氣一給上之由、　（同右後篇18⑤）

(3) 將軍家御不例御減氣之間。有二御沐浴之儀一云々。（同右47⑧）

(4) 將軍家御不例之事。（略）自二今日一聊有二御減氣一云々。　（同右54②）

(5) 日來不例依レ属二減氣一。今日沐浴云々。　（同右73④）

(6) 祈二今出河入道相国疫病一。忽令レ属二減氣一　旁顕二效験一之由云々。　（同右307⑤）

(7) 若君御前御不例減氣之後。　（同右313⑭）

(8) 御不例亨。聊有二御減氣一云々。　（同右353③）

(9) （痢病）有忽減氣属之可レ賜之由。　（同右475⑧）

(10) 武州室所勞減氣之間。　（同右619⑮）

(11) 武州病患属二減氣一。汗太降云々。　（同右754⑨）

(12) 御悩亨。（略）可レ有二御減氣一之由。　（同右871③）

右記に例示した『吾妻鏡』の「減氣」を検討してみると、そのいずれも「御不例、御悩、疫病、所勞、病患、御悩」などのような人間の体の非健康的状態或いは病氣と共に用いることが分かる。尚、残りの鎌倉時代漢文の「減氣」の用例を考察しても、そのすべては『吾妻鏡』と同様に人間の病氣等と共起して使われている。だから、鎌倉時代漢文に於ける「減氣」は、平安時代の（一）の「病勢が衰え、快方に向かう」という意義として用いられて、古記録の継承性を反映する一方、平安時代の（二）の意義は消失して時代の差異も呈出する。亦、平安時代の「減氣」と対義的に使用される「増氣」という表現は鎌倉時代になっても依然として見られる。これは次に挙げる用例から分かる。

△將軍家御不例。追レ日増氣。　（吾妻鏡前篇603⑬）

△二位家御不例自二去七日一御増氣。　（同右後篇30⑥）

次に和漢混淆文に現われた五例の「減氣」を挙げてその意味を考えよう。

(1) 而間、日來経此ノ病少減氣有リ　（今昔物語集巻13、248⑥）

(2) 師ノ病頗減氣有テ祭ノ験有ニ似タリ　（同右巻19、112⑨）

(3) 母少減氣有レバ、弟ノ僧、三條京極ノ邊ニ師ノ有ケル所ヘ行ユク　（同右巻27、523⑨）

cf 傍ニ有ル人、病頗ル減ズル氣有リト見ル程ニ　（同右巻15、356⑩）

例(1)(2)(3)の「減氣」は参考例の「減ズル氣」と、文の構造として類似性を見せるし、又意味としても同じく病氣がよくなるということを示す。その故に、「減氣」という和製漢語は「減ズル氣」から形成されたのではないかと推定される。[7] 但し、何時成立したかについては尚検討を要することである。

(4) 其後種々ニ療治スレバ、少シキ減氣在リシカドモ、又増氣在リテ、　（正法眼藏隨聞記322⑫）

(5) 上人所勞少減氣出來被ヒニケリ、　（栂尾明恵上人傳上287⑤）

右記に引いた和漢混淆文に現われた「減氣」は五例とも「病、所勞」と共起して用いて、前述した平安鎌倉時代漢文と共通している。意義も漢文と同じく病勢が衰えて、快方に向かうことを表して、漢文の踏襲と看取される。殊に「減氣有（在）リ」という構文を見ると、漢文に多用される「有減氣」を彷彿させて、それを訓読したように思われる。

尚、病氣の全快することを表す表現は右記の平安時代のそれを継承する一方、次のようなものも現われている。

△出家の故にや宿病次第に本腹して、翌年の夏の比、一門の人々面々に悦事をなしける。

（有朋堂文庫本平治物語、清盛出家の事237③）

以上、鎌倉時代までの「減氣」を巡って考究してきた。次のことが明らかになる。「減氣」は意味も使用量と範囲も現代語の「元氣」と酷似する。一方、「元氣」「験氣」は意味にしろ使用量にしろ現代語の「元氣」との懸隔が大きく、双方の間に存する意味上の連続性が「減氣」より非常に希薄であると考えられる。従って、現代語の「元氣」は「減氣」より派生したものであると考えれば、自然ではないか。

さて、「減氣」は何時「元氣」になり、又何故そうなったのか。以下、それについて考えてみたい。先ず、「減氣」から「元氣」に変形した時代とその過程とを検討してみよう。右記の考察で明らかになるように、鎌倉時代まで「減氣」と「元氣」とは使用量の差こそあれ、両者が併存していた。時代が下って、室町時代文献に目を向けてみると、前掲した、文明六（一四七四）年の頃に下学集を本に再編された『文明本節用集』には「減氣」が依然として掲載されている。つまり、『文明本節用集』の成立時代に「減氣」がまだ存在していることが明らかになる。これに関しては『文明本節用集』と同時代の公家日記に「減氣」が使用されていることからも察知される。

(1) 御邪氣御減氣御之間（康富記一378上⑧嘉吉三年（一四四三））

(2) 女房自今曉例所勞血懐、實發、已難儀之由告來間、急予罷向了、自晩聊得減氣了、（親長卿記7上①文明二年（一四七〇））

(3) 御不豫去夜御增氣以外云々、近臣等大略祇候、今日聊御減氣云々、珍重々々、（宣胤卿記128上⑪文明十二年（一四八〇））

「減氣」に対してその反対の意味を表す「増氣」も依然として用いられる。

△御不豫又有御増氣云々

（親長卿記67下(4)文明十二年（一四八〇））

△室町殿御歡楽以外御増氣、

（宣胤卿記233上⑩延徳元年（一四八九））

時代が更に下り、弘治二（一五五六）年本、天正十七（一五九〇）年本節用集にも「減氣」が尚載っている。これは同年代の文献に「減氣」が使用されていることからも分かる。

(4) 晴、向東庵、病氣大概減氣也

（実隆公記大永八年（一五二八）七月十三日）

(5) 則一藥進候、今日被得減氣候、

（言継卿記天文二年（一五三一）八月十一日）

とあるように、意味としても「減氣」は相変わらず平安鎌倉時代のそれと同じように病氣と共に用いられ、病勢が衰えて、快方に向かうことを表す。

しかし、同時代の古辞書には収録されていない「験氣」が「減氣」と同じ意味で文献に現われている。

△孔子ノ死ッ玉フ時ハ、子路ハ衛ノ亂ニ死ッテイサリシ也。胡氏曰此必夫子失ニ司寇一之後云々病間曰ー病間トハ歡藥ノチト験氣ナル時ヲ云。病中トハ病ノ間斷ナリ。小□（ハ産）ナル時ハ病ノ間斷アリ。故少差ヲ病ノ間ト云ル也。

（応永二十七年本論語抄400⑧）

△次岡殿昨晩御咳氣之由有之間、見舞了、御験氣之由有之

（言継卿記永禄二年（一五五九）二月十四日）

同じ『言継卿記』では右記の例(5)の「減氣」と同じ意味で、「験氣」も併用されている。これは両者の相互替代が始まっていることを意味すると見受けられる。斯様な現象は「減氣」と「験氣」に止まらず、次の例の示すように「減」と「験」との間にも生じている。

△腰痛平愈熱氣少散、猶頭痛云々、少減也、

（言継卿記永禄六年（一五六三）四月九日）

△御阿子昨夕之藥にて少験収云々、尚藥之事承候間又服進之、

（同右永禄三年（一五六〇）二月十三日）

△遠成同前、乍去少減之由、宗也藥、

（多聞院日記二、永禄十二年（一五六九）九月十三日）

△煩以之外也、笠方昨日下藥にて少験由也、

（同右永禄十二年（一五六九）九月十日）

△従去月二十一日寶光院朦氣、于今無減之由沙汰有之、

（同右天文十九年（一五五〇）八月五日）

△發心院へ見廻申了、御朦氣御験也、珍重々々

（同右八月二十一日）

のように例中の「減」と「験」は、表記が異なるものの、意味用法としては同じと見られる。これは「減」が「験」へ変わろうとする

という表記変化の過渡期のため、両者併用という現象が発生したのであろう。但し、鎌倉時代に遡ってみれば、「験」と「減」も決して右例のように、同じ意味として両者が混用されることなく、別々の意味用法として使い分けされている。例えば、次の例のように、「験」は（佛神の加護の）しるし、「減」は（病状が）かるくなるという異なった意味を表す。

△去夜心神落居、佛神之験歟。（玉葉三、39下⑬）

△邪氣快渡然而神心猶無し減。日數淺之故也。（同右、40上②）

尚、時代が更に下ると、「験氣」は「減氣」より使用率が高くなる。例えば、右記の『言経卿記』の記録者山科言継の息子である言経が書き記した『言経卿記』（天正四（一五七六）年～天正十九（一五九一）年巻一、二、四）のみを調べてみたところ、同じ意味として「験氣」は213例も現われているのに対して「減氣」は僅か一例しか確認できない。即ち、「減氣」が次第に「験氣」という表現にとってかわっていくと見られる。これはいうまでもなく江戸時代の成立した古辞書には「減氣」の替わりに「験氣」が収録されている背景となると看取される。

「減氣」が右例から分かるように室町時代になって、「験氣」によって表記されるようになったことは次に挙げる所謂明恵上人の傳記系諸本からも察知される。これらの傳記系諸本は、内容としては共通の性格を持つものの、その説話単位の出入り等に於いて著しい相異も有する。亦書写年代としては時代の格差が多く見られる。

栂尾明恵上人傳（書写年代　鎌倉時代末期）

文覺上人所勞難治由同法ヨリ告給タビタリシカハ、今一度爲向顔有高尾、罷シテ、上人所勞少減氣出來被レニケリ、告云、深思様有、

（高山寺資料叢書第一冊、明恵上人資料第一、十ウ五）

梅尾明恵上人物語（書写年代　室町時代）

文覺上人所勞難治由同朋ヨリ告タリシカハ今一度爲向顔一又高尾ヘ罷タリシニ上人所勞少減ノ氣被ケリ出來一、告曰ク、深思様アリ、

（同右、十二オ三）

栂尾明恵上人傳（書写年代　慶長十四年（一六〇九））

文覺上人所勞難治ノ由シ同法ノ許ヨリ告來シカハ今一度向顔ノ爲タメニ又高雄ニ歸リヲ然ニ上人ノ所勞少減氣セリ上人告云深ク思様アリ、

（同右、十二ウ四）

栂尾明恵上人傳記（書写年代　慶長四年（一五九九））

文覺上人所勞ノ難治之由同宿ノ方ヨリ告タリシカハ、今一度向顔ノ爲ニ高尾ヘマカリシニ上人所勞少験氣ノ得ラレニケリ告曰、深思様アリ

（同右、三ウ五）

のように、内容はいずれも明恵上人十四歳の時文覺上人が病を患って、起きたことを言う。が、書写年代によって、本来意味としても「減氣」と書くべきところが「験氣」に取って変わっている。右記の例から「減氣」が「験氣」によって表記されることに対して疑い

を容れないと言えよう。

さて、「験氣」は「減氣」の替わりに室町時代に登場するようになったが、何故当時代の古辞書（管見に及んだもの）には収録されていないのか。これは一つ古辞書編纂上の連続性、継承性に一因があると思われる。もう一つはそれらの古辞書の成立の時には「験氣」が「減氣」ほど表記としてはまだ一般化しておらず、周辺的な存在だったということにも因由するのではないか。例えば、『親長卿記』（文明二（一四七〇）年～明応七（一四九八）年）には「減氣」が二十一例現われているが「験氣」が一例も見えないということはひとつの証左でもあろう。

しかし、江戸時代に下って、慶長頃より元和、寛永頃の成立と言われる『和漢通用集』と、享保二（一七一七）年版の『書言字考節用集』とには「減氣」が已に記載されておらず、その替わりに「験氣」が登録されている。

病験氣（やまひのげんき）　（和漢通用集155上②）

験氣（げんき）疾—病所言　（書言字考節集言辞11冊14⑥）

の如く、「験氣」は「減氣」と同様に病氣と共起しているし、意味も恐らく「減氣」と変わらないのであろう。つまり、「減氣」は意味が変わらずに、表記のみが変わって、「験氣」となったと考えられる。室町時代に「験氣」は、確かに「減氣」のようにまだ一般的ではないが、時代の下るに伴って、使用量が次第に増えるため、江戸時代成立の古辞書に収録されたのであろう。

△四百四病は世に名医ありて験氣をえたるかならずなり　（浮世草子、日本永代蔵三・一）

△病を引かけ、次第に枕あがらず生薬をあたへつれどもさらに験氣のなき事をかなしく　（同右・信可笑記五・五）

△すくやかな男にはかにかはきの病とりつき、食へども〳〵あきたらず。祈禱、願立、醫者もんぢやく、のこる方なくしけれども、露ほども験氣なく、今をかぎりのとき、　（江戸笑話集・かはきの病334⑥）

とあるように、例中の「験氣」と同じく病氣と共起する。亦、構文から見ても「験氣をえたる」「験氣のなき」が前の時代の「得減氣（前掲の『言継卿記』の例等）」「無減氣」と酷似してそれの訓読のように見える。更に意味としても「減氣」と同じである。だから、ここの「験氣」は決して前の時代に僅かに見えた、祈禱、加持などの效き目という意味を表す「験氣」ではなく、単に「減氣」の別の表記として用いられると理解してよかろう。それが出来たのは江戸時代になって「減氣」と「験氣」とが音韻上に於いては全く相通じることによるものであると思われる。

更に、「減氣」に替わって「験氣」が登場したため、『邦訳日葡辞書』の編訳者は「ゲンキ」に「験氣」を充てたのであろう。亦、先学研究として現代語の「元氣」が「験氣」から来たという説もここ

から起因したのではないかと推察される。しかし、通時的に見れば、「験氣」は「元氣」に変身する前に、先ず「減氣」からの変容が起こったのであろう。換言すれば、「減氣」は「元氣」に変わるまで「験氣」として表記される時期も存在していた。

次に「元氣」について考えよう。西鶴の『日本永代蔵』とほぼ同年代の貞享年間に刊行した『地蔵菩薩霊験記』には、意味としては「減氣」或いは「験氣」と表記すべきであるが、下記のように「元氣」となっている。

△我等ノ夫モ此百日アマリ悩ミ伏シタリシモ、此ノ酒ニテ元氣ヲ得タルコト、

cf 十三日辛丑雨下、予自一昨日病悩、今日得減氣　（康富記一275上⑨）

cf 女官相脈取之、験氣也　（言継卿記352下⑧）

△正和五年ノ夏左吉病ニ犯レテ月ヲ超テ元氣ヲ。

「元氣」は病氣と共に用い、参考例の「得減氣」を「元氣ヲ得タル」と訓み下すが如く「減氣」「験氣」と同じく病氣が快方に向かうという意味を表す。これは本来の中国語のままで萬物を成す精氣という意味を示す前の時代の「元氣」と異なる。だから、右例の「元氣」は前の時代に極小量に現われた「元氣」ではなく、「減氣」或いは「験氣」の代替であろう。[8]

言葉の変化は決してある日に一斉に行われるものではなく、徐々に変わっていくのである。従って、「減氣と験氣」「験氣と元氣」が併存する時期が有るのは寧ろ自然であろう。

（四）おわりに

以上の考究で、「減氣」は、和製漢語として平安時代に和化漢文で生まれて、鎌倉時代まで変わることなく使用されていたが、室町時代に下って一時期に「験氣」で表記されたことがある。最後に「元氣」に変化したのが近世になってからではないかと推定できよう。斯様な変化が出来たのは三者の音韻上に於ける類似性－音通に因由するものである。これは言語内部の第一の要因として考えられるが、その他に意味上の関連性による要因も挙げられる。[9]

(1) Guenqiゲンキ（験氣）病氣がなおること、または快方に向かうこと、例；Guenqiuovru（験氣を得る）

(2) Guenqina, Gueqinigozaruゲンキナ、またはゲンキニゴザル（験氣な、または験氣にござる）健康である。または病氣が一層よくなる。　（邦訳日葡辞書296）

「減氣」は以上の考察で明らかになるように、いずれも人間の体の非健康的な状態或いは病氣と共起して、その病勢が衰えて、快方に向かうという意味として用いる。これは右記の『邦訳日葡辞書』の(1)の意味と一致すると見られる。が、『邦訳日葡辞書』に挙げてある(2)の意味を見ると、病氣に関連せず、単に身体が健やかであることとなる。「減氣」が近世になって、「元氣」に変わったのは、病

氣の回復が本来の身体的な気力を取り戻すことになるためではなく、病氣に全く関わることなく、只人間の体が健康であることのみを示す意味の出現にも一因を求めることが出来ようかと思う。即ち「減氣」は病勢が衰えて快方に向かうという意味を表すが、「減」字の働きによるものであるが、病氣と関係なしに、只健康であるという意味が派生したため、依然として「減」字でそれを表現すれば、「減」の「衰える」等の意味に束縛されて、健康であるという意味を連想しかねる。所以、「減氣」が「元氣」になったのであろう。それでは、「減氣」が「元氣」に変わった背景は何か、いわば、如何なる言語外部の要因がその変化を触発させたのか。これについては次の諸点が考えられる。一つは、江戸時代になって、朱子学の「理氣二元論」を批判し、「氣一元論」を主張するという思想論争[10]が熾烈な権力闘争と共に盛に展開されたことによって、「元氣」がよく用いられて、幅広く知られたことである。もう一つは、江戸時代の社会の安定によって、人々が養生つまり健康への関心が高まっている。「氣一元論」を唱える思想家はその氣運に乗じて、養生のための著書[11]を出して、その中で「氣」「元氣」を説明し、その「元氣」を大事にするのが何よりの養生であると鼓吹した。例えば、貝原益軒の『養生訓』に於いては、人は天地の「元氣」を受けてこの氣を以って生の源、命の主とするのであるから、氣の充足を計り減退を防がねばならぬと説かれている。更に養生の道は氣を整えるにあり、胃の気は「元氣」の別名とし、毒は氣を塞ぐもの、薬とは氣の偏とするとされる。「元氣」は斯様な社会的な背景によって、市民権を得るようになったのであろう。亦一つは宗教の隆盛によるところもある。臨済禅を復興した人ー白隠慧鶴は布教のために養生書[12]を作って、「氣一元論」を宣伝した。「元氣」はこういう言語外の要因によって、過去のどの時代よりも使用語彙として知られるようになった[13]。

日本文献では、中国語出自の「元氣」と和製漢語の「減（験）氣」とが長い間にそれぞれ各自の意味を持つため、共存していた。が、近世になって、「減（験）氣」は意味の変化が発生して、音韻上の類似性を土台に、「元氣」で書き表すようになった。元来別々の語がこれによって合体するという形になった。これによって、本来の中国語のままでずっと変化しなかった「人間をも含めての萬物を構成する源泉」という意味の「元氣」は更に「減（験）氣」の表す意味を獲得できたのである。現代日本語の「元氣」の意味はその両者を合わせて形成したものであると思う。「減（験）氣」は長年に亘って日本文献に於いて使用されていたが、「元氣」で表記されたため、近代または現代の日本語には姿を消して全く見えなくなった。室町時代までよく用いられていた「減氣」が突然に日本語から消失してしまったのはそのためであろう。

［注］

(1) 鈴木修次『漢語と日本人』(昭54、みすず書房)等

(2) 原田芳起『平安時代文学語彙の研究』(昭39・9、風間書房)、佐藤喜代治『日本の漢語』(昭54・角川書店)等

(3) 大槻文彦編『大言海』(昭7)

(4) 「(減氣)「おこたる気」を漢字に移して音読するに至ったものであると思われる」と書かれている。(同(2)但し、『三巻本色葉字類抄』『観智院本類聚名義抄』等の古辞書を調べてみたところでは、「ヲコタル」と「減」の対応関係を確認できない。本文に掲げたように、「オトロフ」に対して「減」が充てられている。

(5) 「元氣」(一)指天地未分前混一之氣。(二)指人の精神、生命力的本原。(『辞源』商務印書館)

(6) 榊原邦彦「記録体では左経記の万寿三年五月四日の条に、「御悩猶不怠、是御寸白云々」と「怠」の語が見えるが、普通は「平復」、「平癒」、「平愈」、「平損」、「減平」などが多い、これらは仮名作品の「おこたる」に対応し、治るの意であろう。「宜成」「有減気」「有減」なども見られる」(平安時代の「オコタル」について『松村博司先生古稀記念国語国文学論集』昭54・11・5、笠間書院)と記されている。(注、用例の出処省略、筆者)

(7) 小野正弘「元氣」(『日本語学』一九九三・12・6明治書院)にも彼様なこ指摘が見られる。

(8) 「わが国で古くから用いてきた「げんき」が「元気」という語と結びついて一つになったことも考慮に入れる必要がある」と述べられている。(佐藤喜代治『日本の漢語』(昭54・角川書店))

(9) 「病気平癒のために加治、祈禱や医薬による治療を加え、その効果のあらわれとして快方に向かう意で「験氣」の字も用い、また、病気の回復は本来の身体的気力を取り戻すことであるから、「元気」の字も用いるに至っている」と書かれている。(『時代別国語大辞典』室町時代編二の「減気・験気・元気」の条、一九八九、7、10、三省堂)

(10) 木村清孝「禅と「気」—白隠禅の活力—」(『気の世界』一九九〇・2・28、東京大学出版会)

△赤塚行雄『気の文化論』の5社会に於ける「気」の展開(一九九〇・9・25、創拓社)

(11) 貝原益軒『養生訓』(正徳三年)

(12) 同(10)

(13) 尚　要因としては、「これも「福恵全書」に、非二加以二数十年之培養一元気終末易復也。(巻五)(一例略)とあるが、このやうな例を見れば、この語が広く行なわれ、それがやがてわが国にも行なはれるに至ったと考へることは決して無理でなかろう」(佐藤喜代治「頼山陽の書簡に見える漢語について」『国語と国文学』昭45・10)と、「近世におびただしく出版された中国医学の書における「元気」を、日本の医者が採りいれ、それが広まった結果、現在のような「元気」の用法が行なわれるに至ったという路筋が推定できそうに思われる」とも(同(7)挙げられている。

検索文献

本稿で調べた中日両国文献は以下の通りである。

(一)中国文献

A、韻　文

毛詩・楚辞(哈佛燕京学社引得)、嵇康集(嵇康集校注本)、阮籍集(阮籍上下本)、陸機詩(陸士衡注本)、陶淵明詩文索引(淵江忠道編)、謝霊運詩(謝康楽詩注本)、謝宣城詩(万有文庫本)、全漢詩索引・北魏詩索引、全宋詩索引・北斉詩索引・北周詩索引・斉詩索引・全三国詩索引(松浦宗編)、全漢三国晋南北朝詩上・下(丁福保編)、玉臺新詠索引(小尾郊一・高志真夫編)、陳子昂

詩(陳子昂集本)、孟浩然詩(四部備要本)、王維詩(趙松谷本)、李白歌詩(繆本)、杜詩(宋刻本)、孟郊詩索引(野田一雄編)、張籍歌詩(張籍詩集本)、韓愈歌詩(廖本)、白氏文集歌詩索引(平岡武夫・今井清編)、柳宗元歌集(宋世綵堂)、李賀詩(李長吉歌詩四巻)、杜牧詩(樊川詩集本)、温庭鈞歌詩(四部備要本)、岑参歌詩(四部叢刊本)、何氏歷代詩話(艾文博主編)、漢詩大観(井田書店)、唐詩観賞辞典(上海辞書出版社)、宋詩鑑賞辞典(上海辞書出版社)宋詞鑑賞辞典(北京燕山出版社)

B、散　文

周易・尚書・周礼・儀礼・礼記・春秋左伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孟子・孝経・爾雅(十三経注疏)、墨子引得・荀子引得(哈佛燕京学社引得特刊)、管子引得(中文研究資料中心研究資料叢書)、老子索引(豊島睦編)、荘子引得(弘道文化事業有限公司編)、列子引得(山口義男編)、呉子・商子　六韜・呂氏春秋・韓非子・淮南子・説苑(四部叢刊本)、孫子索引(東北大学中国哲学研究室編)、国語索引(東方文化学院京都研究所編)、山海経通検(中法漢学研究所編)、戦国策(土礼居　宋本)、潛夫論(四部備要本)、水経注、孔子家語・論衡・揚子法言・抱朴子・西陽雜俎(四部叢刊本)、史記索引(中国廣播電視出版社)、漢書索引(黄福鑾編)、後漢書語彙集成上・中・下(藤田至善編)、方言校箋(周祖謨方言校箋本)、風俗通義付通検(中法漢学研究所編)、白虎通引得、(哈佛燕京学社引得)、三国志及裴注綜合引得(哈佛燕京学社引得)、曹植文集(法蘭西学院漢字研究所)、文選索引(斯波六郎編)、文心雕龍索引(岡村繁編)、蒙求(長承本)、遊仙窟(醍醐寺蔵)、世説新語索引(高橋清編)、貞観政要(貞観政要定本)、唐律疏議引(荘為斯編著)、陳書評語索引(久保卓哉編)、漢魏六朝小説選譯上(上海古籍出版社)、搜神記・飛燕外傳・迷楼記・開河記・李林甫外傳・李泌傳・東城老父傳・高力士傳・梅妃傳・揚太眞外傳・本事詩・剣侠傳・劉無隻傳(晉唐小説・国譯漢文大成)、冥祥記(人民文学出版社)、宋史列傳儒林巻(中華書局)、輟耕録通検(逸園履之刊本)、東京夢華録「夢粱録」語彙索引(梅原郁編)、朱子語類口語語彙(塩見邦彦編)中国随筆索引(京都大学東洋史研究会編)、中国随筆著索引(佐伯富編)、金史語彙集成上中下(小野川秀義編)、敦煌變文集(人民文学出版社)、敦煌變文彙録(周紹良編、上海出版公司)、敦煌變文学義通釋(新文豊出版公司)、蘇東坡詩集

C、仏　書

法華経一字索引付開結二経(東洋哲学研究所編)、一切経音義索引(沼本克明・池田證壽・原卓志編、古辞書音義集成19)、唐招提寺本全光明最勝王経(訓点語と訓点資料第一輯)、山田本妙法蓮華経(訓点語と訓点資料第七輯)、聖語蔵願経四分律(訓点語と訓点資料第30輯)、成実論(東大寺図書館蔵)、正倉院地蔵十輪経巻5・7(勉誠社)、石山寺蔵仏説太子須陀拏経(訓点語と訓点資料第71・72輯合併号)、沙彌十戒威儀経(石山寺蔵)、百法顯幽抄(東大寺図書館蔵)、南海寄帰内法傳(天理図書館蔵)、東寺蔵不動軌(訓点語と訓点資料第65輯)、大東急記念文庫蔵大日経義釈(訓点語と訓点資料第16・17・23・27・28輯)、大毘盧遮那成仏経疏(高山寺蔵)、興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師傳(「興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師傳古点の国語学的研究」築島裕)、広島大学蔵八字文殊儀軌(訓点語と訓点資料題39輯)、大唐西域記長寛元点(「古点本の国語的研究」中田祝夫)、大正新修大蔵経、中国往生伝(東大寺図書館蔵)

D、その他

説文解字、説文解字注(上海古籍出版社)、大廣益會玉篇(四部叢刊本)、廣韻・集韻(上海古籍出版社)、龍龕手鏡(中華書局)、類篇(中華書局)、康熙辞典(中華書局)、佩文韻府(王雲五編)、辞源(商務印書館)、中文大辞典(中国文化研究所出版)、漢語大詞典(漢語大詞典出版社)、中国語大事典(角川書店)、辞海(中華書局)

(二)日本文献

I、奈良時代文献

憲法十七条・上宮聖徳法王帝記(聖徳太子集・日本思想大系)、法華義疏(大日

本仏教全書第一巻)、正倉院古文書一～二十三巻(大日本古文書(一))、古京遺文(狩谷棭斎編)、続古京遺文(山田孝雄・香取秀真編)、平城宮木簡一・二・三・四、藤原宮木簡一・二、長岡京木簡一・平城市長屋王邸宅と木簡(奈良国立文化財研究所)、寧楽遺文上・下、元興寺伽藍縁起・古事記・新訳華厳経音義私記・遷都平城詔・造立盧遮那仏詔・貞恵伝・武智麻呂伝・乞骸骨表、私教類聚(岩波日本思想大系)、日本書紀・万葉集・懐風藻(岩波日本古典文学大系)、風土記漢字索引(植垣節也編)

II、平安鎌倉室町時代文献

A、和　文

竹取物語・伊勢物語・土佐日記・多武峯少将物語・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寝覚・狭衣物語(岩波日本古典文学大系)、源氏物語大成(中央公論社)、新訂新版かげろふ日記索引、宇津保物語本文と索引(宇津保物語研究会　笠間書院)、大鏡の研究(秋葉安太郎著、桜楓社)、浜松中納言物語・更級日記・堤中納言物語(岩波日本古典文学大系)、栄花物語本文と索引(梅沢本・高知大学人文学部国語史研究会編)、古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・続古今和歌集(新編国歌大観第一巻)、梁塵秘抄総索引(小林芳規・神作光一　武蔵野書院)、中務内侍日記・とはずがたり(新日本古典文学大系　岩波書店)

B、漢　文

文華秀麗集・菅家文草菅家後集・日本霊異記・和漢朗詠集(岩波日本古典文学大系)、文鏡秘府論(図書寮本)、遍照発揮性霊集・江都督納言集(六地蔵寺本)、本朝文粋(久遠寺蔵本)、高山寺本表白集(高山寺資料叢書第二冊)、凌雲集、経国集・都氏文集・田氏家集・雑言奉和・栗田左府尚齒会詩、扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩和・殿上詩合・本朝無題詩・法性寺関白御集(群書類従第六輯)、三教指帰(天理図書館本)、作文大体(天理図書館本)、続日本紀・日本後記・令義解・令集解・続日本後記・日本文徳天皇実録・三代実録・類聚三代格・弘仁格・延喜式・延喜交替式・貞観交替式・延暦交替式・政事要略・日本紀略・扶桑略紀・百錬抄・朝野群載・本朝文集・本朝続文集・本朝世紀(新訂増補国史大系)、律令・本成寺金堂供養願文・革命勘文・藤原保則伝・寛平御遺誡・九条右丞相遺誡・菅家遺誡・陸奥話記(岩波日本思想大系)、古語拾遺(新撰日本古典文庫)、三代御記逸文集成(所功編国書刊行会)貞信公記・九暦・小右記・権記・御堂関白記・左経記・春記・水左記・後二條師通記・中右記・帥記・永昌記・長秋記・殿暦・兵範記・台記・吉記・三槐記・猪隈関白記・勘仲記・歴代宸記・花園天皇宸記伏見天皇宸記・三長記・岡屋関白記・平戸記・後愚昧記・康富記・碧山日録・親長卿記・家忠日記・宣胤卿記(大日本古記録・増補史料大成)、西宮記(増訂故実叢書)、玉葉、明月記(国書刊行会)、吾妻鏡(新訂増補国史大系)、平安遺文(竹内理三編・東京堂刊行)、尾張国解文の研究(阿部猛著・大原新生社刊)、鎌倉遺文(一～十六)(竹内理三編・東京堂刊行)、高野山文書(一～四)(大日本古文書家わけ第一)、東大寺文書(一～八)(大日本古文家わけ第十八)、将門記(真福寺本)、御成敗式目(古典保存会)、明恵上人行伏(明恵上人資料第一・高野山資料叢書第一冊)、江家次第・江談抄(新訂増補故実叢書)、平安時代仮名書状の研究(久曽神昇著・風間書房)、雲州往来享禄本研究と索引・本文研究編、和泉往来(京都大学国語古文資料叢書)、高山寺本古往来(高山寺資料叢書第二冊)、東山往来・菅丞相往来・釈氏往来・十二月往来・貴嶺問答・尺素往来・雑筆往来・垂髪往来・消息往来・常途往来・百也往来・庭訓往来・弟子僧往来集・南都往来・鎌倉往来・賢済往来・曾席往来・新十二月往来・御慶往来・異本十二月往来・手習覚往来・山密往来・十二月消息・新札往来・瑚玉集(日本教科書大系往来編)、全剛波若経集験記古訓考証稿(石寺本・黒板本)、全剛寺蔵注好撰(後藤昭雄編・和泉書院)、高野山宝寿院蔵日本法花験記(臨川書店)、往生要集(最明寺本)、選擇本願念仏集(往生院本)、探要法華験記

(醍醐寺蔵)、日本往生極楽記、大日本国法華験記・続本朝往生伝・本朝神仙伝・拾遺往生伝・続拾遺往生伝・三外往生伝・本朝新修往生伝・高野山往生伝・念仏往生伝・往生要集・諸山縁起・白山之記(岩波日本思想大系)、園城寺伝記(大日本仏経全書八十六巻寺誌部四)、天台座主記(続群書類従第四輯下)、教行信証(岩波文庫)、法然一遍(岩波日本思想大系)、地蔵菩薩霊験記(古典文庫)、玉造小町壮衰書(山内潤三・木村晟・栃尾武編輯)、浦島子伝・富士山記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・暮年記(群書類従第六輯)、五山文学集(岩波新日本古典文学大系)、小補集・補庵集・小補東遊集・後記・補庵京華前集・蒲萄集(五山文学新集第一巻　玉林竹二編)

C、和漢混淆文

東大寺諷誦文稿(中田祝夫・風間書房)、今昔物語集・宇治拾遺物語・保元物語・平治物語・平家物語(覚一本)(岩波日本古典文学大系)、発心集本文自立語索引(高尾稔・長嶋正久・清文堂)、方丈記(大福光寺本)、海道記(尊経閣文庫本)、東関紀行本文及び総索引(江口正弘監修・笠間索引叢書六十一)、延慶本平家物語(勉誠社)、源平盛衰記(有朋堂文庫本)、沙石集(慶長十年古活字本・勉誠社)、古本説話集総索引(山内洋一郎・風間書房)、打聞集の研究と総索引(東辻保和著・清文堂)、十訓抄文と索引(泉基博編・笠間書院)、三宝絵詞自立語索引(馬淵和男監修・中央大学国語研究会編)、三教指帰注総索引及び研究(築島裕・小林芳規・武蔵野書院)、宝物集(書陵部蔵・古典保存会)、法華百座聞書抄総索引(小林芳規編・武蔵野書院)、閑居友本文及び総索引(峰岸明・王朝文学研究会編)、草案集(建保四年本山口光円氏蔵)、明恵上人夢記・却廢忘記・光言句義釈聴集記・栂尾明恵上人伝・栂尾明恵上人物語・明恵上人神現傳記(明恵上人資料一・二　高山寺資料叢書第七冊)、六波羅御家訓・北野天神縁起・八幡愚童訓甲(岩波日本思想大系)、古事談(新訂増補国史大系)、正法眼蔵随聞記語彙総索引(田島疏堂・近藤洋子編・法蔵館)、正法眼蔵要語(岩波文庫本)、古今著聞集(岩波日本古典文学大系)、中外抄・富家語(勉誠社)、俊頼髄脳・古來風體抄(日本歌学大系第一・二巻)、愚管抄(岩波日本古典文学大系)、歎異抄本文と索引(山田厳・木村晟編・新典社)、大蔵虎明本狂言集の研究(表現社)、古活字本伊曾保物語(臨川書店)、義経記・太平記・室町物語・御伽草子(岩波日本古典文学大系)、天草版平家物語対照本文及び索引(江口正弘著)、雑兵物語(桜楓社)、榻鳴暁筆(三弥井書店)、毛詩抄(岩波書店)、杜詩続翠抄・漢書抄・古文真宝・桂林抄・古文真宝彦龍抄・山谷抄・荘子抄・百丈清規抄・日本書紀兼倶抄・日本書紀桃源抄(続抄物資料集成　清文堂)

D、その他

篆隷万象名義(高山寺資料叢書第一)、新撰字鏡(臨川書店)、和名類聚抄古写本声点本文および索引(馬淵和夫・風間書房)、世俗諺文(天理図書館蔵本)、三巻本色葉字類抄(風書書房)、類聚名義抄(図書寮本・観智院本)、名語記(勉誠社)、伊京集・明応五年本節用集・饅頭屋本節用集・易林本節用集・黒川本節用集(古本節用集六種研究並びに総合索引・中田祝夫・風間書房)、文明本節用集(風間書房)、運歩色葉集・温故知新書・撮壤集・頌要集(中世古辞書四種研究並びに総合索引・中田祝夫・風間書房)、古本下学集七種研究並びに総合索引(中田祝夫・林義雄・風間書房)、書言字考節用集研究並びに索引(中田祝夫・小林祥次郎・風間書房)、邦訳日葡辞書(岩波書店)、ロドリゲス日本大文典(土井忠夫訳)、和漢通用集(勉誠社)、塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔(臨川書店)、倭玉篇五本和訓集成(北恭昭編・汲古書院)

[附記]

本稿は、平成四年の大学院生研究発表(口頭)と平成六年度広島市立大学特別研究費の研究報告書をもとに加筆したものです。

――らん・ちくみん、広島市立大学助教授――